中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討

杉本 希映[a]

[a]湘北短期大学生活プロデュース学科

【抄録】

本研究は，中学生を対象に，「居場所環境」と精神的健康との関連を検討したものである。「居場所環境」を「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の３種類の「居場所」の有無の組み合わせにより８群に分類し，精神的健康との関連を分析した。また、３種類の「居場所」の有無と精神的健康との関連も検討した。その結果，中学生の「居場所環境」においては，「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」と精神的健康との関連が示され，特に「家族のいる居場所」との関連が高かった。本研究の結果と先行研究をふまえ，中学生という発達段階における「居場所環境」について考察した。

【キーワード】

「居場所環境」　精神的健康　中学生

問題と目的

教育相談やカウンセリングの場面で，「学校に居場所がない」「家に居場所がない」と話す中学生がいる。その訴えの裏には何があるのだろうか。本研究では中学生が感じている「居場所」の主観を捉え，精神的健康との関連を明らかにすることを目的とした。

子どもの「居場所」への注目は，不登校児童生徒のための場所として1980年代から登場したフリースクールであるといわれている（安齊，2003；住田，2003a）。学校に居場所がない子どもたちのための「居場所」づくりの動きから，「居場所」というものへの関心が高まってきたのである。1992年には，文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して－」という報告を出し，学校内での「心の居場所」づくりの必要性が指摘され，さらに2003年には文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課が「子どもの居場所づくり新プラン」により，「3ヵ年計画で計画的に子どもたちの居場所を用意する」ことを発表した。このように，子どもの「居場所」への関心は，「居場所」がないことへの注目から，「居場所」を作るという動きに進展しつつあるといえる。教育現場だけではなく，心理臨床場面においても，「居場所がない」という感覚を持つ人への注目が高まり（忠井・本間，2006），成長発達や心理的支援における「居場所」の重要性が指摘されている（村瀬・重松・平田・高堂・青山，1996）。しかし，実証的な研究による知見が蓄積されないままに，

＜連絡先＞

杉本 希映　sugimoto@shohoku.ac.jp

「居場所」という言葉だけが先行していることが危惧される。「居場所」を作るという動きが高まる中で，子どもの「居場所」を実証的に明らかにしていくことが急務と考えられる。

「居場所」の実証的な研究は，1990年代から行われ始めた。そもそも「居場所」とは，大辞林（1995）によると「人が居る所」「いどころ」という意味であり，人が居る所という物理的な意味の用語であった。しかし，最近は「心の居場所」という使われ方もされているように，そこにいる時の心理的な状態も含めた用語として認知されつつある。杉本・庄司（2007）の「居場所」の先行研究の概観によると，「居場所」の構成概念は，環境要因（「居場所」の持つ物理的な環境状態，そこにいる他者の存在，そこにある物の存在等）と感情要因（「居場所」での個人の行動やそれに伴う感情）の2つに大きく分類でき，感情要因には，「精神的安定」「受容・共感・連帯感」「肯定的感情・体験」「他者排除」の4つがあるとされる。

しかしそれらの構成概念は，すべての「居場所」に同等ではなく，場所によって異なってくるため，「居場所」を分類する必要がある。「居場所」を分類する際の重要な視点は，主観性―客観性，場所の社会性―個人性であると考えられる（杉本・庄司，2007）。主観性―客観性の主観性とは，「自身がその場所を自分の『居場所』として実感し，その場所に自分の『居場所』としての意味を付与するという主観性」（住田，2003a）であり，客観性とは，「他者から見た居場所であり，他者はその人にとって相応しい場所とみなしている」（三本松，2000）が，その人自身の主観性が伴っていない場合であり，「居場所」とは見なされない。

場所の社会性―個人性とは，社会・他者との関わりの有無を問う視点であり，この分類を提唱している例として，藤竹（2000）の「社会的居場所」「人間的居場所」，「匿名的居場所」の分類，西村（2001）の「対他」「対社会」的「居場所」と「対自」的「居場所」の分類，安齊（2003）の「前向きな居場所」と「後ろ向きの居場所」の分類，中島（2003）の「公的居場所」と「私的居場所」の分類が挙げられる。「居場所」の具体的な場所を調査した研究（松田，1997；中村，1998；中村，1999；小畑・伊藤，2003；杉本・庄司，2006a；堤，2002）からは，児童期から青年期の「居場所」となる具体的な場所は，年代によって若干の差はあるものの，家等「家族のいる居場所」，学校等「友だちがいる居場所」，他者とは関わらない「自分ひとりの居場所」の3つに大きく分けられることが明らかとなっており，実際には「社会性―個人性」の2分類ではなく，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の3分類であるといえる。

これらの先行研究をもとに，「居場所」を個人の主観性で捉え，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の3分類の心理的機能の質的な差異を検討した結果からは，「自分ひとりの居場所」は「被受容感」が低く，「行動の自由」「思考・内省」が高く，逆に「友だちのいる居場所」は「被受容感」が高く，「行動の自由」「思考・内省」が低く，「家族のいる居場所」は，この2つの「居場所」の中間の心理的機能を有していることが示されている。これらの結果から，種類の異なった「居場所」を複数持つことで，心理的機能を充足して行く必要性が示唆され，複数の「居場所」を総合的に捉える「居場所環境」という概念が提示されている（杉本・庄司，2006a）。

このように，「居場所」に対する実証的な研究が少しずつ蓄積されつつあるが，いまだ課題も挙げられる。杉本・庄司（2007）は，1990年以降の「居場所」研究を検討し，以下の4点を今後の課題として挙げた。1点目は，「居場所」を分類する必要性，2点目は，「居場所環境」という視点の導入の必要性，3点目は，「居場所」の規定要因の分析の

必要性，4点目は，「居場所環境」とメンタルヘルス及び学校適応との関係の分析の必要性である。本研究では，これらを踏まえ，4点目のメンタルヘルスとの関連を検討することを目的とする。本研究においては，「居場所」については，先行研究に倣い，他者から見た客観的な「居場所」の有無ではなく，本人が「ある」と感じるか「ない」と感じるかという個人の主観により捉えることにした。また，さまざまな「居場所」を広く捉えるため「落ち着く場所」など精神状態を特定してしまうような定義は行わない。しかし，本研究で捉えたい「居場所」は，実際の場所であり，空想の中など実際に居られない場所は含めないため，操作的定義は，「いつも生活している中で，特にいたいと感じ，実際にいられる場所」とし，調査時には「居場所」の補足説明として付記することとする。「居場所」の分類については，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の3分類の有効性と質的差異が確認されている（杉本・庄司，2006a）ため，本研究においてもこの3分類とする。また杉本・庄司（2007）による今後の課題の2点目である「居場所環境」という視点の導入の必要性を考慮し，本研究においても「居場所環境」という概念を導入する。「居場所環境」の定義は，杉本・庄司（2006b,c）に倣い，「様々な特性を持った居場所をどのようなバランスで持っているのかを総合的に捉えた場合の個人を取り巻く環境」と定義する。Table1に本研究における「居場所環境」の8分類と以後の論文中での略語を示した。たとえばF群は，「自分ひとりの居場所」と「家族のいる居場所」の2種類の居場所を持っている生徒のグループということになる。

では本研究のテーマである「居場所」と精神的健康とは，関連があるのであろうか。「居場所」研究ではないが，環境心理学の領域では，健康回復的・治療的環境をテーマとした研究が増加してきている。たとえばKorpela & Hartig（1996）は，お気に入りの場所と他の場所との比較により，お気に入りの場所の健康回復的性質が高いことを明らかにしている。つまり，ある場所の持つ精神的健康に与える影響が検討されつつある。「居場所」研究においては，田島（2000）が，高校生・大学生を対象に，「居場所」感覚と抑うつ感を検討し，「居場所」がある人はない人よりも，自分に対して肯定感が強いこと，「居場所」がない人は，自分に対して否定的で，抑うつ感が強いことを明らかにした。また，家族を自分の「居場所」として捉えている人は，自分に対する満足度が高いことも明らかにしている。堤（2002）は，大学生の「居場所がない」という感覚に焦点を当て，「居場所がない感覚尺度」を作成したうえで，「自我同一性混乱尺度」との関係を検討し，同一性混乱の度合いが高いものほど，「居場所がない感覚尺度」の「対他的疎外感」「自己疎外感」が高いということを明らかにした。住田（2003b）は，「居場所のない子ども」と「『自分1人－自室型』の居場所を持つ子ども」と「居場

Table 1 「居場所環境」の8分類と本論文中の略語

分類の内容	（略）
A群「居場所」なし	（なし）
B群「自分ひとりの居場所」1種類のみ	（ひとりのみ）
C群「家族のいる居場所」1種類のみ	（家族のみ）
D群「友だちのいる居場所」1種類のみ	（友だちのみ）
E群「自分ひとりの居場所」と「家族のいる居場所」2種類	（ひとり＋家族）
F群「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」2種類	（ひとり＋友だち）
G群「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」2種類	（家族＋友だち）
H群「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」3種類	（3種類すべて）

所がある子ども」を比較検討した結果,「居場所のない子ども」はどの生活領域でも対人関係において受容・承認されていないと感じており，特に母親との関係が否定的であり，否定的な自己イメージを形成していることを明らかにしている。杉本・庄司（2006b）は，大学生を対象に，大学生の現在の「居場所環境」と共に，回想法により中学生の頃の「居場所環境」も捉え，それらと精神的健康との関連を検討している。その結果，中学生の頃に「居場所」があり，さらに「家族のいる居場所」を含んだ「居場所環境」を持っていたと認知していること，現在「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ「居場所環境」を持っているということが精神的健康に関連していることを明らかにしている。さらに，過去の中学生の頃の「居場所」の有無の認知の方が，大学生の現在の「居場所」の有無よりも，現在の精神的健康度と関連しているという結果も示されている。この結果より，中学生の頃の「居場所環境」が，その後の精神的健康において長期的な影響を持つ可能性が示唆されているといえる。

これらの先行研究の結果より,「居場所」と精神的健康には何らかの関連があることは推測される。しかし，中学生の全般的な精神的健康との関連を検討したものは見当たらない。これまでの「居場所」研究では精神的健康との関連を取り上げているが，抑うつ感，自我同一性，自己イメージ，学校適応など，それぞれ異なる特定次元にのみ焦点を当てており，中学生の精神的健康全般を包括的に取り上げたものではない。そこで本研究では，精神的健康全般に関わる尺度を用いることで，どのような「居場所環境」が精神的健康のどのような側面と関連を有するのかを，より詳細に明らかにしていきたいと考える。中学生の頃の「居場所環境」が後の精神的健康と関連しているという結果（杉本・庄司，2006b），中学生の「居場所環境」では「居場所」がない生徒が3割近くおり，大学生と比べると有意に多いという結果（杉本・庄司，2007）を鑑みれば，中学生の「居場所環境」は重要であり，検討して行く必要があると考えられる。

以上より，本研究は，中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連を検討することを目的とする。精神的健康と家族関係，友だち関係の関連は，ソーシャルサポートの研究など，これまでも多くの研究がなされてきている。本研究では，それら対人関係研究のこれまでの知見も踏まえたうえで，さらに「居場所」研究の独自性を提示できるものと考える。それは,「居場所がある」あるいは「居場所がない」という主観を検討することにより，教育現場，心理臨床場面での対応の示唆が得られるという意義があること，また「居場所環境」という概念を導入することで，個人の生活環境を包括的に捉える視点を提供することができると考えるからである。

全般的な精神的健康を測定する尺度としては，GHQ28（一般精神健康調査票日本語版）があるが，この尺度は，理解が困難と思われる項目や，ネガティブな表現の項目が多いことから，中学生に使用することは不適切と考えられる。そこで，GHQ28の「身体症状」,「不安と不眠」,「社会的活動障害」,「うつ傾向」4因子を考慮しつつ，中学生におけるストレス反応尺度，疲労感尺度を参考に，中学生においても使用可能な尺度項目を検討し，使用することとした。

方　法

1. 調査対象

首都圏内の公立中学生382名（男子192名，女子190名）である。学年による人数は，1年生123名（男子54名，女子69名），2年生131名（男子70名，女子61名），3年生128名（男子68名，女子60名）である。

2. 調査時期と手続き

2005年2月中旬に実施した。学級担任が，教室で質問紙を調査対象者に配り，その場で回収した。なお，学級担任より答えたくない質問には答えなくてもよいこと，回答が他の人に知られることはないことが確認された。

3. 調査内容

フェイスシートで，性別・学年について尋ねた後，以下の項目について回答を求めた。

(1) 精神的健康について　岡安・嶋田・坂野（1992）のストレス反応尺度より，「抑うつ・不安感情」5項目，「身体的反応」尺度8項目，庄司（1998）の疲労感尺度より「意欲・気力の低下」6項目，「イライラ」尺度5項目，計24項目を使用した。「まったくあてはまらない（1）」から「よくあてはまる（4）」まで4件法で回答を求めた。

(2)「居場所環境」について　まず「居場所」の有無について回答を求めた。「居場所」については，「あなたには現在「居場所」がありますか。「居場所」とは「いつも生活している中で，特にいたいと感じ，実際にいられる場所とお考えください。」と付記した。「居場所」があると回答した者のみ，「居場所」を最大5つまで具体的な場所を自由記述してもらい，そのそれぞれの「居場所」について，「自分ひとり」「家族がいる」「友だちがいる」「家族・友だち以外の人がいる」のどれに当てはまるかを選択してもらった。

結　果

1. 精神的健康についての尺度構成

精神的健康を測定するために使用した24項目の尺度構成を検討するために，因子分析を行った。負荷量.35に満たなかった「項目8　食欲がない」，「項目22　腹が痛む」と，2つの因子に.35以上で負荷した「項目2　不安を感じる」を削除し，再度因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った（Table2）。その結果，4因子構造であることが確認された。第Ⅰ因子は「抑うつ・不安」，第Ⅱ因子は「無気力」，第Ⅲ因子は「イライラ」，第Ⅳ因子は「身体的反応」と命名した。α係数を算出したところ，α =.78～.89であり，内的整合性が確認された。

2.「居場所環境」についての基本統計量

(1)「居場所」の有無について　「居場所」の有無については，「居場所」がある生徒261名（70.5%），ない生徒は109名（29.5%）という結果であった。学年差と性差をχ^2検定により検討したところ，学年においては，有意差は認められなかったが（$\chi^2(2)$ =.15, *n.s.*），性別においては有意差が認められ（$\chi^2(1)$ =16.69, $p < .001$），調整済み残差分析の結果，「居場所」がある生徒では女子の方が多く，「居場所」がない生徒では有意に男子の方が多かった（Table3）。

(2)「居場所」の分類について　5つまで自由記述してもらった「居場所」それぞれに対し，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」「家族・友だち以外の人がいる居場所」のどれにあてはまるか選択してもらった回答を集計した。その結果をTable4に示す。最も多かったのが「友だちのいる居場所」，ついで「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」となっている。なお，「家族・友だち以外の人がいる居場所」は，選択した人数が少なかったことと，そこにいる他者が多岐にわたり同質の「居場所」としては捉えられないため，以降の分析においては除外した。

(3)「居場所環境」8分類について　5つまで挙げてもらった「居場所」のそれぞれに対し，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」「家族・友だち以外の人のいる居場所」

Table 2　精神的健康尺度の因子分析結果（プロマックス回転後）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
Ⅰ　抑うつ・不安（α=.89）					
24　さみしい気持ちだ	.98	−.10	−.08	.04	.85
19　泣きたい気持ちだ	.84	−.02	.07	−.12	.65
11　悲しい	.83	−.01	−.03	.01	.65
21　心が暗い	.69	.05	.05	.03	.58
Ⅱ　無気力（α=.84）					
4　勉強する気が起きない	−.12	.85	−.05	−.12	.50
13　勉強がはかどらない	−.06	.84	−.03	−.05	.59
16　何事も面倒くさい	.04	.60	.04	.08	.49
14　頭がさえなくなる	−.02	.54	.04	.26	.56
20　物事に熱心になれない	.23	.53	.10	−.12	.43
6　すぐ気力がなくなる	−.03	.44	.01	.33	.47
Ⅲ　イライラ（α=.89）					
10　怒りっぽくなる	−.07	−.03	.96	−.02	.79
7　イライラしてくる	−.03	−.10	.86	.11	.73
18　短気になる	.00	.06	.82	−.02	.71
23　他の人や物にあたりたくなる	.20	.14	.58	−.13	.52
Ⅳ　身体症状（α=.78）					
1　疲れやすい	−.19	−.14	.10	.86	.56
5　肩がこる	.01	.04	−.10	.58	.31
9　頭が重い	.23	.02	−.03	.52	.45
15　目が疲れる	−.01	.21	−.01	.42	.32
17　体がだるい	.21	.21	.03	.40	.51
12　よく眠れない	.24	−.08	−.06	.38	.22
3　ささいなことが気になる	.23	−.08	.19	.35	.37
因子間相関	—	.48	.56	.57	
		—	.58	.64	
			—	.62	
				—	

Table 3 「居場所」の有無の学年別・性別人数と調整済み残差分析の結果

	「居場所」あり		「居場所」なし		合計
	人数（%）	調整済み残差	人数（%）	調整済み残差	
1年	84 (69.42)	−0.33	37 (30.58)	0.33	121 (100)
2年	91 (71.65)	0.34	36 (28.35)	−0.34	127 (100)
3年	86 (70.49)	−0.01	36 (29.51)	0.01	122 (100)
男子	114 (60.96)	−4.09	73 (39.04)	4.09	187 (100)
女子	147 (80.33)	4.09	36 (19.67)	−4.09	183 (100)

Table 4　中学生の「居場所」4分類別人数の集計

	1つ目	2つ目	3つ目	4つ目	5つ目	合計
自分ひとりの居場所	119	43	28	10	4	204
家族のいる居場所	53	43	17	12	4	129
友だちのいる居場所	66	97	43	7	2	215
家族・友だち以外の人がいる居場所	3	4	4	3	1	15

Table 5 「居場所環境」の学年別・性別人数（%）

	A群（なし）	B群（ひとりのみ）	C群（家族のみ）	D群（友だちのみ）	E群（ひとり+家族）	F群（ひとり+友だち）	G群（家族+友だち）	H群（3種類）	合計
1年生									
男	22 (43.1)	4 (7.8)	1 (2.0)	5 (9.8)	5 (9.8)	6 (11.8)	3 (5.9)	5 (9.8)	51 (100)
女	14 (21.2)	3 (4.5)	5 (7.6)	2 (3.0)	4 (6.1)	13 (19.7)	13 (19.7)	12 (18.2)	66 (100)
2年生									
男	25 (36.8)	7 (10.3)	2 (2.9)	4 (5.9)	5 (7.4)	10 (14.7)	5 (7.4)	10 (14.7)	68 (100)
女	12 (20.7)	6 (10.3)	1 (1.7)	2 (3.4)	3 (5.2)	14 (24.1)	7 (12.1)	13 (22.4)	58 (100)
3年生									
男	25 (40.3)	9 (14.5)	2 (3.2)	2 (3.2)	1 (1.6)	9 (14.5)	6 (9.7)	8 (12.9)	62 (100)
女	11 (21.2)	6 (11.5)	2 (3.8)	3 (5.8)	5 (9.6)	13 (25.0)	6 (11.5)	6 (11.5)	52 (100)
合計	109	35	13	18	23	65	40	54	357

のどれにあてはまるかを選択してもらった結果を元に，Table1のように，「居場所環境」をA群（なし）からH群（3種類すべて）まで8分類した。Table5に，「居場所環境」8分類別の人数と比率を示した。

3.「居場所環境」と精神的健康との関連

(1)「居場所環境」8分類と精神的健康との関係

「居場所環境」8分類と精神的健康度との関連を検討するために，「居場所環境」8分類を独立変数，精神的健康の下位尺度を従属変数とした分散分析を行った（Table6）。

その結果，「抑うつ・不安」では，有意差は認められなかった。「無気力」では，有意差が認められ，多重比較（Tukey-HSD法，5%水準）の結果，A群（なし）がF群（ひとり＋友だち）・G群（家族＋友だち）・H群（3種類すべて）より有意に高く，B群（ひとりのみ）がG群（家族＋友だち）・H群（3

Table 6　精神的健康度尺度の基本統計量と分散分析結果

		抑うつ・不安	無気力	イライラ	身体症状
	n	*M*（*SD*）	*M*（*SD*）	*M*（*SD*）	*M*（*SD*）
A群（なし）	96	1.78 (0.78)	2.82 (0.65)	2.53 (0.98)	2.33 (0.63)
B群（ひとりのみ）	32	2.00 (0.97)	2.87 (0.69)	2.66 (0.92)	2.64 (0.70)
C群（家族のみ）	12	1.69 (0.53)	2.65 (0.65)	2.44 (0.68)	2.21 (0.50)
D群（友だちのみ）	17	1.88 (0.94)	2.68 (0.64)	2.12 (0.93)	2.29 (0.90)
E群（ひとり+家族）	22	1.76 (0.86)	2.52 (0.58)	2.31 (0.91)	2.27 (0.48)
F群（ひとり+友だち）	62	1.76 (0.74)	2.45 (0.65)	2.26 (0.93)	2.43 (0.65)
G群（家族+友だち）	34	1.51 (0.71)	2.32 (0.65)	1.97 (0.71)	2.00 (0.65)
H群（3種類すべて）	50	1.65 (0.76)	2.35 (0.80)	2.08 (0.92)	2.20 (0.62)
	*F*値	1.13	4.42 ***	2.77 **	2.85 ***
			F,G,H<A	G<A,B	G<B,F
			G,H<B		

** p<.01　*** p<.001

種類すべて）より有意に高く，A群（なし）とB群（ひとりのみ）の「無気力」得点が高いことが明らかとなった。「イライラ」でも，有意差が認められ，G群（家族＋友だち）よりA群（なし）・B群（ひとりのみ）の方が有意に高かった。「身体症状」でも有意差が認められ，G群（家族＋友だち）よりB群（ひとりのみ）・F群（ひとり＋友だち）が有意に高かった。以上より，A群（なし）とB群（ひとりのみ）の精神的健康度が他の群に比べて良好ではないことが示された。

(2) 3種類の「居場所」の有無と精神的健康との関連

さらに，「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」の有無と精神的健康度との関連を検討する。3種類の「居場所」の有無（ない群を1，ある群を2としてダミー変数を割り当てた）と性別（男子を1，女子を2としてダミー変数を割り当てた）・学年を独立変数，精神的健康の4つの下位尺度を従属変数として，重回帰分析（強制投入法）を行った（Figure1）。

その結果，「抑うつ・不安」においては，性別（β = .24），学年（β = .15）から有意な正の影響力，「家族のいる居場所」の有無から負の影響力（β = −.13）を受けていた。よって性別では女子の方が，学年では学年が上がるほど，また「家族のいる居場所」がない方が「抑うつ・不安」が高くなることが示された。「無気力」においては，学年から正の有意な影響力（β = .23），「家族のいる居場所」の有無（β = −.14），「友だちのいる居場所」の有無（β = −.19）から負の有意な影響力を受けていた。よって，学年が上がるほど，また「家族のいる居場所」「友だちの居場所」がない方が「無気力」が高くなることが示された。「イライラ」においては，性別（β =.19），学年（β =.18）から正の影響力，「友だちのいる居場所」の有無から負の影響力（β = −.16）を受けていた。よって，性別では女子の方が，学年では学年が上がるほど，また「友だちのいる居場所」がない方が，「イライラ」が高くなるが示された。「身体的反応」においては，学年から正の影響力（β =.27），「家族のいる居場所」の有無から負の影響力（β = −.18）を受けていた。よって，学年が上がるほど，また「家族のいる居場所」がない方が，「身体的反応」が高くなることが示された。

考　察

1. 精神的健康度尺度について

精神的健康についての尺度構成は，「抑うつ・不安」「無気力」「イライラ」「身体的反応」の 4因子となり，高い信頼性が確認された。一般精神的健康調査（GHQ28）と因子と比べると，「身体的反応」は同様の因子が認められ，GHQ28の「社会的活動障害」は本研究の「無気力」に対応し，GHQ28の「不安・不眠」と「うつ傾向」の2因子が本研究における「抑うつ・不安」と対応しているといえる。本研究における「イライラ」は，GHQ28との対応が見られなかった。しかし，中学生用ストレス反応尺度（岡安ら，1992）では「不機嫌・怒り感情」，中学生の疲労感尺度（庄司，1998）では「イライラ」が認められており，中学生の精神的健康の一側面として特徴的な因子であると考えられる。よって，本研究で使用した尺度は，中学生の全般的な精神的健康を測定する尺度としては，妥当であると考えられる。また，重回帰分析による「抑うつ・不安」「イライラ」は，女子の方が高く，4つの下位尺度で上級生であるほど高得点であるという本研究の結果は，岡安（1998），庄司（1998）の結果を支持し，上級学年になるほど，そして女子が高いという一般的な傾向を示しているといえる。

2. 「居場所環境」についての基本統計量

「居場所」が「ない」という回答が男子に多いと

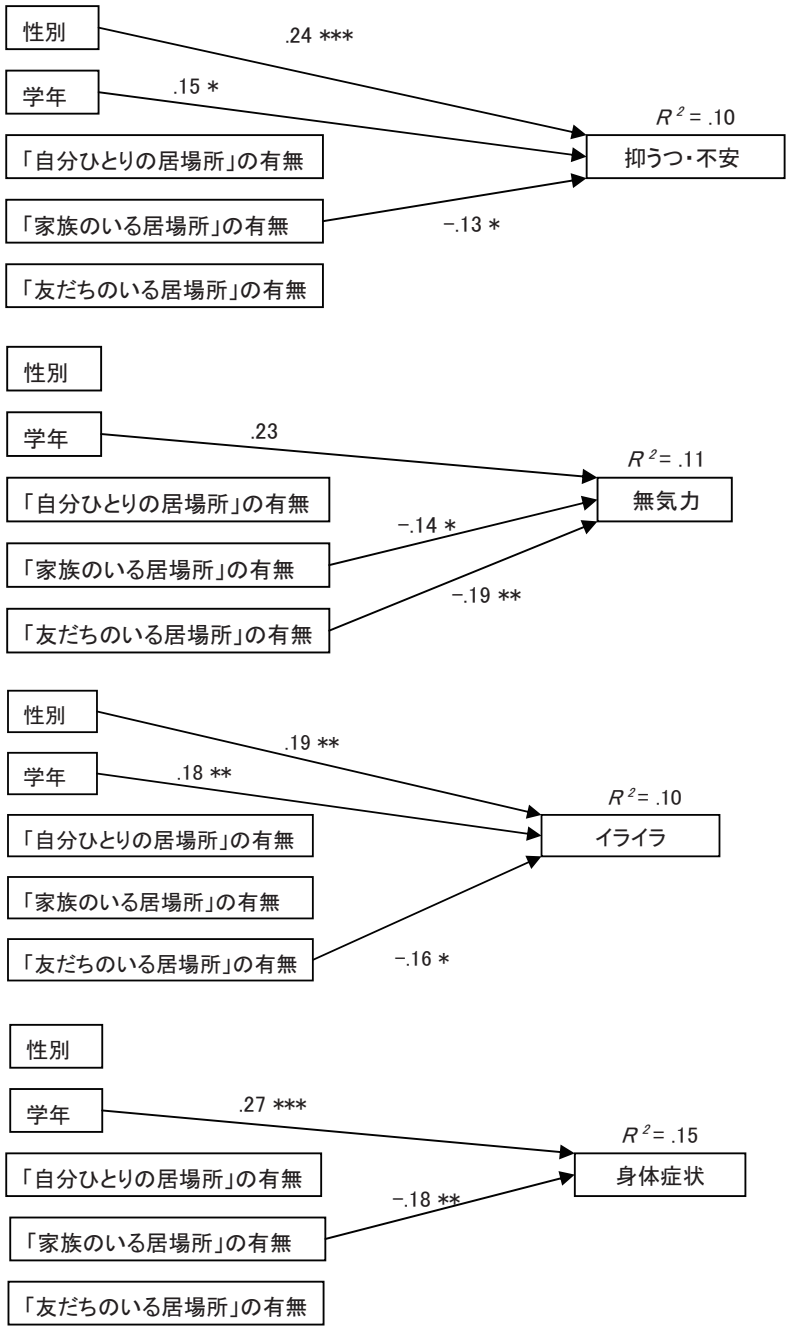

Figure 1　精神的健康度の４つの下位尺度を従属変数，３種類の「居場所」の有無・性別・学年を独立変数とする重回帰分析の結果

（5%水準で有意差が認められたパスのみを示した　* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$）

いう結果は，杉本・庄司（2006a）の結果を支持するものであった。「居場所」の有無の規定要因（杉本・庄司，2006e），「居場所環境」の規定要因（杉本・庄司，2006d）においても，性別が関連していることは示されている。しかし，なぜ中学生の男子において「居場所」がない生徒が多いのかについては明らかにされておらず，さらなる検討が必要といえる。

3.「居場所環境」と精神的健康との関連

「居場所環境」と精神的健康度との関連は，「居場所環境」8分類による分散分析と，3種類の「居場所」の有無による重回帰分析によって検討した。分散分析においては，「居場所」の持たないあるいは1種類しか持たないのか，あるいは複数併せ持つかによる違いを検討することができた。また重回帰分析においては，3種類の「居場所」のいずれの有無がメンタルヘルスと関連しているかを明らかにすることができた。以下，メンタルヘルスの下位尺度ごとに，結果を考察する。

「抑うつ・不安」では，8分類による差は認められず，3種類の「居場所」の有無においては関連が認められ，「家族のいる居場所」がないと「抑うつ・不安」が高くなることが示されたが，影響力は学年，性別に比べ低かった。岡安ら（1993）のソーシャルサポートとストレス反応の軽減効果を検討した結果では，「抑うつ・不安」は，ソーシャルサポートにより軽減されにくいストレス反応であることが明らかにされている。これらのことより，「抑うつ・不安」に関しては，「家族のいる居場所」がある方が低くなるが，対応を考えた場合，これのみでは十分ではないことがうかがえる。

「無気力」では，A群（なし）がF群（ひとり＋友だち）・G群（家族＋友だち）・H群（3種類すべて）より有意に高く，B群（ひとりのみ）がG群（家族＋友だち）・H群（3種類すべて）より有意に高かった。このことよりA群（なし）とB群（ひとりのみ）の生徒は，F群（ひとり＋友だち）・G群（家族＋友だち）・H群（3種類すべて）という複数の「居場所」を持つ生徒に比べて「無気力」であることが明らかとなった。さらに，3種類の居場所の有無との関連を見てみると，「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」がないと「無気力」得点が高くなることが示されている。したがって，「無気力」においては，「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」が関連しているといえる。中学生においては，友人関係における学校適応感が無気力感（現在から将来にかけての自分自身が把握できないことを表す「自己不明瞭」，他者に対する不信感・不満足感を表す「他者不信」，精神・身体的疲労感を表す「疲労感」の3因子構造で信頼性，妥当性が確認されている）とも関連がみられ，強い影響力を持っていることが示されている（下坂，2001）。また，対象は高校生であるが，無気力感（「意欲減退・身体的不全」「将来展望の欠如」「消極的友人関係」の3因子構造）において，友人サポートは「意欲減退・身体的不全」「消極的友人関係」，両親サポートは「消極的友人関係」にそれぞれ関連が認められている（田中・栗山・園田，2002）。「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」は共に「居場所」の心理的機能の中の「被受容感」が高い（杉本・庄司，2006a）。これらのことより，特に友だちと家族のいる「居場所」において「被受容感」を得られることが「無気力」得点を下げていると考えられる。どちらか1つを持つよりも，2つ両方を持つ方が「無気力」得点が低いという分散分析の結果も考慮すると，「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」の両方を持つことが重要と考えられる。

「イライラ」は，「居場所環境」の8分類では，G群（家族＋友だち）・H群（3種類すべて）よりA群（なし）の方が，G群（家族＋友だち）よりB群（ひ

とりのみ）の方が有意に高かった。さらに3種類の「居場所」の有無においては，「友だちのいる居場所」がない方が「イライラ」が高いことが示されていることより，「イライラ」には「友だちのいる居場所」が寄与しているといえる。「友だちのいる居場所」は，他の「居場所」に比べ「自己肯定感」の機能が高いことが示されており，その「自己肯定感」機能とは，「居場所」において，何かに夢中になることができ，そこでの自分に自信が持てることを表している（杉本・庄司，2006a）。したがって，「友だちのいる居場所」において，何かに夢中になり自己肯定感を得られることで，中学生に特有の精神状態である「イライラ」を発散する役割を果たしていると考えられる。

「身体的反応」は，「居場所環境」の8分類で有意差が認められ，G群（家族＋友だち）がB群（ひとりのみ）とF群（ひとり＋友だち）より有意に低かった。B群（ひとりのみ）とF群（ひとり＋友だち）という「家族のいる居場所」がない群の身体的反応が良くない傾向にあることが明らかとなった。3種類の「居場所」の有無においても，「家族のいる居場所」がない方が，「身体的反応」が高くなることが示された。したがって，「身体的反応」においては，「家族のいる居場所」が寄与しているといえる。五十嵐・萩原（2004）の不登校傾向と親との愛着関係を検討した結果において，両親との愛着関係が良好でないと「精神・身体的反応を伴う不登校傾向」が高いという関連が示されている。「家族のいる居場所」は，「居場所」のすべての機能を安定して持っていることが示されていることから（杉本・庄司，2006a），最も基礎的な身体的状態に影響を与えていると考えられる。

総合的考察

3種類の「居場所」の有無で見てみると，「家族のいる居場所」が「抑うつ・不安」「無気力」「身体的反応」と3つに影響力を持っており，最も関連が強かった。中学生は，思春期に入り，第二反抗期の時期でもあり，親との心理的距離が離れる時期ではあるが，家族のいる場所を「居場所」と感じられることは，精神的健康にとって重要であるとことが示された。また，「友だちのいる居場所」の有無も，「イライラ」と「無気力」に関連しており，中学生の精神的健康に寄与している。「友だちのいる居場所」の具体的な場所は，ほとんどが学校であった。したがって，この時期の学校適応が重要であるということが，「居場所環境」からみても指摘できたと考える。一方，「自分ひとりの居場所」の有無は，重回帰分析の結果，どの精神的健康度にも影響を及ぼしていなかった。しかし，分散分析の結果からは「自分ひとりの居場所」1種類しか持たない場合，さらには「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」しか持たない場合に，「居場所」なしと共に精神的不健康であるという結果が出ている。それにもかかわらず，重回帰分析において影響が認められなかったのは，「家族のいる居場所」を併せ持つ場合，あるいは3種類すべてを持つ場合には，少なくとも精神的不健康を助長するものではないという可能性が考えられる。つまり「自分ひとりの居場所」は「被受容感」が低く，「行動の自由」「思考・内省」が高いという心理的機能を有しているとされるが（杉本・庄司，2006a），他に「家族」あるいは「友だち」のいる「居場所」を持っている場合には，その心理的機能が異なる可能性があることが推測される。今回の調査では，その差異を検討することはできなかったため，「自分ひとりの居場所」については，この点を考慮した検討を行うことが今後の課題として残された。

本研究の中学生においては，「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ「居場所環

境」を持つことが精神的健康に寄与することが示唆された。中学生を対象とした本調査の結果と，大学生を対象とした杉本・庄司（2006b）の結果より，発達段階により，良好な精神的健康に寄与する「居場所環境」が異なることが示されたといえる。杉本・庄司（2006b）の大学生を対象とした調査結果では，大学生においては，「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ「居場所環境」を持つということが，良好な精神的健康に関連していることが明らかとされている。したがって，中学生では，「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」を持つこと，大学生においては「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」を持つことが，その時期の精神的健康に寄与する「居場所環境」であるといえる。

近年の児童・生徒に関する発達研究は，天岩（2004）が指摘するように，「児童・生徒をとりまく環境（学校・友人・家庭）と本人のもつ行動特徴や認知の仕方を合わせて検討した研究」が主流となってきている。本研究で導入した「居場所環境」という概念は，個人を取り巻く環境と個人の認知を包括的に捉えることができるため，中学生の諸問題を捉え，対応するための1つの視点となり得るのではないかと考えられる。本研究において，中学生の「居場所環境」が精神的健康度と関連していることを見出せたことは，「居場所環境」を整えるというアプローチ，具体的には中学生の精神的健康に対しては，「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ「居場所環境」を整えるということが，有効であるという可能性を提供できたと考える。つまり，教育相談やカウンセリングの中で，中学生の持つ「居場所」の主観を捉えることは，その後の対応への方向性をもたらし得るのではないだろうか。

しかし，本研究においては，「居場所環境」と精神的健康の関係のみを取り上げて分析しており，他の要因との関連は検討できていない。「居場所」ではないが，プライベート空間の研究においては，「パーソナリティ→プライベート空間の確保→育児ストレス感→不適応行動」という因果関係モデルが検証されている（泊，1999）。「居場所」においても，性格等個人属性が，空間選択や空間利用に影響を及ぼし，空間利用がストレスや不適応行動など精神的健康度に影響を与えることが想定される。「居場所」の規定要因としては，性格傾向，愛着歴との関連が報告されている（杉本・庄司，2006d，e）。性格傾向，愛着関係等個人内の規定要因との関連を含めた因果関係モデルの検証が今後の課題と言える。これらの点を詳細に検討することで，発達段階による差異だけではなく，個人の特性による差異も含めた，精神的健康に寄与する包括的な「居場所環境」モデルを提示できると考える。

【引用文献】

天岩靜子　2004　児童・生徒の発達研究の動向　教育心理学年報 , 43, 48-57.

安齊智子　2003 「居場所」概念の変遷　発達 , 24, 33-37.

藤竹暁　2000　居場所を考える　藤竹暁（編）現代のエスプリ別冊　現代人の居場所　至文堂 Pp.47-57.

五十嵐哲也・萩原久子　2004　中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連　教育心理学研究 , 52, 264-275.

Korpela,K.M. & Hertig,T. 1996 Restorative qualities of favorite places. *Journal of Environmental Psychology,* 16, 221-233.

松田孝志　1997　現代高校生における居場所の内包的な構造　筑波大学教育研究科カウンセリング専攻修士論文抄録集 , 31-32.

文部省　1992　登校拒否（不登校）問題について―児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して（学校不適応対策調査研究協力者会議報告）　教育委

員会会報 , 44, 25-29.
中島喜代子　2003　中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」三重大学教育学部研究紀要 人文社会科学 , 54, 125-136.
中村泰子　1998　居場所イメージの発達的変化―○△□法の基礎的研究として―　児童・家庭相談所紀要 , 15, 45-56.
中村泰子　1999 「居場所がある」と「居場所がない」との比較―○△□法の基礎的研究として―　児童・家庭相談所紀要 , 16, 13-22.
西村美東士　2001　青少年施設の居場所機能―90 年代の青少年問題関連文献の分析から―　徳島大学大学開放実践センター紀要 , 12, 73-81.
小畑豊美・伊藤義美　2003　中学生の心の居場所の研究―感情と行動及び意味からの考察―　情報文化研究 , 17, 155-167.
岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二　1992　中学生用ストレス反応尺度の作成の試み　早稲田大学人間科学研究科，5,23-29.
岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二　1993　中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果　教育心理学研究 , 41, 302-312.
村瀬嘉代子・重松正典・平田正子・高堂なおみ・青山直英　1996　居場所を見失った思春期・青年期の人々への統合的アプローチ―通所型中間施設に通っていた人の治療・成長促進要因―　研究助成論文集 , 32, 151-159.
三本松政之　2000　高齢者と居場所―新しい福祉のあり方　藤竹暁 （編） 現代人の居場所　至文堂　Pp. 193-203.
下坂　剛　2001　青年期の各学校段階における無気力感の検討　教育心理学研究，49,305-313.
生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室　2004　子どもの居場所づくり　地域子ども教室推進事業の実施にあたって　教育委員会月報 , 656, 2-25.
庄司一子　1998　中学生の疲労感と休息意識に関する研究　教育相談研究 , 36, 19-28.
杉本希映・庄司一子　2006a 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的変化の研究，　教育心理学研究 , 54, 289-299.
杉本希映・庄司一子　2006b　大学生の「居場所環境」と精神的健康との関連―過去の「居場所環境」の認知との比較を中心に―　共生教育学研究 , 1, 37-47.
杉本希映・庄司一子　2006c　大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連―現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として―　筑波教育学研究 , 3, 83-101.
杉本希映・庄司一子　2006d 「居場所環境」における規定要因の検討―過去と現在の比較を中心に―　日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集 , 188.
杉本希映・庄司一子　2006e 「居場所」の有無における規定要因の検討―過去と現在の比較を中心に―　日本カウンセリング学会第 38 回大会発表論文集 , 177.
杉本希映・庄司一子　2007　子どもの「居場所」研究の動向と課題　カウンセリング研究 , 40, 81-91.
住田正樹　2003a　子どもたちの「居場所」と対人的世界　住田正樹・南博文 （編） 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会　Pp. 3-17.
住田正樹　2003b 「居場所」のない子どもたち　住田正樹・南博文 （編） 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在　九州大学出版会　Pp. 169-201.
忠井俊明・本間友巳　2006　不登校・ひきこもりと居場所　ミネルヴァ書房
田島彩子　2000　青年期のこころの「居場所」―「居場所」感覚と抑うつ感―　日本心理臨床学会第 19 回大会発表論文集 , 258.
田中陽子・栗山和広・園田順一　2002　高校生の無気力感と攻撃性に関する研究（2）　日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集，640.
泊真児　1999　Big Five とプライベート空間 7 機能―日常活動を媒介としたパス解析モデルの検討―　日本社会心理学会第 40 回大会発表論文集 , 110-111.
堤雅雄　2002 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱　島根大学教育学部紀要　人文・社会科学 , 36, 1-7.

Junior High School Students' Environment of "Ibasho (Existential place) " and Mental Health

SUGIMOTO Kie

【abstract】

This study was designed to examine the relationship between "environment of Ibasho", an existential place, and mental health for junior high school students. We classified "environment of Ibasho" into 8 groups, by a combination of presence or absence of three types of "Ibasho", which are "a place of one's own", "a place with friends" and "a place with a family", to analyze the relationship to mental health. Also, we examined the relationship between the presence of three "Ibasho" types and mental health. As a result, in "environment of Ibasho" of junior high school students, the relation to mental health was shown in "a place with a family" and "a place with friends", especially strongly in "a place with a family". Taking this study's result and preceding study into consideration, we considered "environment of Ibasho" in junior high school students' developmental stage.

【key words】

"Ibasho (Existential place)", Mental health, Junior high school students